

7. 名古屋大学大学文書資料室



大学文書資料室建物

基本データ

開設年月日：2004年4月1日（大学史資料室より改組）

所在地：〒464-8601 名古屋市千種区不老町（東山キャンパス）

HP アドレス：<http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/>

刊行物：『名古屋大学大学文書資料室紀要』、『名古屋大学大学文書資料室ニュース』他

所蔵資料点数：約 42,000 点

専任職員：助教 1 名、事務職員（主任） 1 名

調査日 2011年9月12日

場所 名古屋大学 大学文書資料室

お話しいただいた方 大学文書資料室助教 堀田慎一郎氏

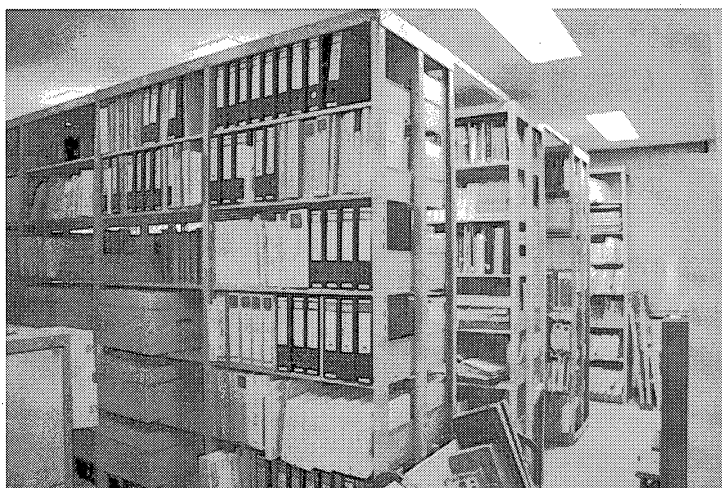
調査者 上崎哉（記録）・酒匂康裕（写真）
田窪直規

1. 名古屋大学における大学アーカイヴズについて

1-1 設置目的・設置経緯—大学史編集室からの連綿とした流れ—

「名古屋大学 大学文書資料室の概要」によれば、大学文書資料室の設置目的は「『本学の法人文書及び歴史にかかわる文書並びにその他の記録を管理し、調査研究を行うとともに、本学情報の公開に積極的に対応する』」ことにあるとされている。すなわち、「名古屋大学における『公文書館』的な機能と『歴史資料館』的な機能をあわせ持った施設として設置された」とされている。

大学文書資料室設置までの沿革は、1985年、大学史編纂事業の為に設置された名古屋大学史編集室に遡る。同編集室は、名古屋大学に関する部局史及び通史を各二冊刊行した後、1996年に廃止され、新たに名古屋大学史資料室へと改編された。その後、1999年から自校史教育が開始される一方で、2001年4月に名古屋大学史資料室が大学史資料室へと改称され、さらに2004年4月からは大学文書資料室へと改組され現在にいたっている。



書庫

1-2 組織形態—専任助教を中心とする運営体制—

大学文書資料室は、室長（併任教授）、室員（専任助教1名）、事務職員（主任1名・事務補佐員6名）の9名で構成されている。これらのうち、まず室長の果たす役割については、担当者によって様々なようである。また、事務補佐員の勤務形態は、週4日1名、週2日2名、週1日3名であり、特に週1日と週2日勤務の補佐員の多くには大学院生やODの学生を充てているという。

一方、大学文書資料室の管理・運営に関する委員会として、センター協議会と大学文書資料室運営委員会が設置されている。この両者のうち、運営に対する関与の度合いが高いのは後者の運営委員会とされている。運営委員会は室長と室員、全部局の代表から構成され、図書館と博物館からはそれぞれ館長が出席し、運営に関する実質的審議の場として機能している。

また、運営委員会内には文書管理担当者連絡会と4つの専門委員会が設置されている。これらのうち連絡会は各部局の文書管理担当者との連絡調整を図るために設置されており、各課の担当者が出席するものである。

1-3 活動内容—大学文書の管理を中心に—

大学文書資料室の果たしている機能は、

- ①大学文書の管理ならびに評価選別に関すること
- ②アーカイブズの継続的な収集、整理、保存および活用
- ③大学文書およびアーカイブズの調査研究
- ④上記のほか、大学資料およびアーカイブズに関すること
- ⑤公文書管理法が定める国立公文書館等としての、特定歴史公文書等の保存および利用に関すること

と整理されている。

これらの業務のうち、まず①はアーカイブズになる前の現用の事務文書に関する機能であり、保存期間が残っていて使用されなくなった文書が主な対象である。ただし、評価選別については、公文書管理法が適用されて以降、評価選別の最終決定権は持たなくなった。それでも、「法人文書管理規程」に基づき大学文書資料室が専門的技術的助言を行う仕組みが採用されており、そのほかにも歴史公文書の選定基準の策定などに深く関与するなど、大きな役割を果たしている。基本的な方針としては法人文書の5%程度を残すこととされている。

一方②の対象となるのは、現用していない文書や個人資料であり、特にOBの自宅等に保管されている部活動等の記録を積極的に受け入れているという。



自校史教育のテキスト

また、定年退職の際に連絡を受ければ、移管や寄贈についても検討しているそうである。

次に文書の活用についてであるが、大学文書資料室は平日が開室日とされており、昼休みの時間でも利用可能である。利用の状況は月あたり5~6人であり、職員やOB・OGの利用が中心である。なお、直接の来館のほか、電話での問い合わせにも対応している。

また、大学文書資料室としての常設展示は行っていないが、ホームカミングデイの際の

展示や、博物館を会場とする博物館等と共催の企画展を実施している。こうした博物館と連携して展示を行っている。こうした博物館との連携は積極的になされており、互いに弱点を補い合うようなスタイルが構築されている。

これ以外にも、1999年10月より自校史教育が始められており、講義資料作成の為に積極的に利用されているが、講義が契機となって学生の利用が促進されているかどうかについては明らかではないとのことであった。

2. 名古屋大学及び私立大学にとっての大学アーカイヴズの意義

— 将来的価値を見据えた歴史文書の保存 —

大学アーカイヴズの第一の意義としては、名古屋大学の歴史を見直して将来に残すことを通じて、最終的には大学コミュニティを強固にする結果になるということが挙げられていた。この意味において、国公立大学と私立大学との間で、大学アーカイヴズの意義の接近が見られるとのことであった。そして、名古屋大学でも、同窓会の際に、大学文書資料室に種々の問い合わせを行う事例が増えてきており、関係者間での認知が進みつつあるようである。

大学アーカイヴズの第二の意義は、将来的価値を見据えた歴史文書の保存である。国立大学にとって、国立公文書館への移設という選択肢もあったが、その場合には廃棄が原則になってしまい、歴史文書の保存が難しくなってしまう。単なる保存であれば、現用文書として保存し続けるということも可能であるが、その場合には公開が難しくなるという問題が生じる。大学アーカイヴズの設置はこの点でも意味があるものだとされている。

また、文書の公開については、50年、80年そして110年という公開基準が設けられているが、それも可能な限り価値ある歴史文書を公開するという趣旨を踏まえてのものである。

調査を振り返って

名古屋大学では、大学文書資料室へのヒアリングを行った翌日、博物館の見学も行った。名古屋大学ゆかりの研究者としては、野依良治博士、小林誠博士、益川敏英博士そして下村脩博士の4名のノーベル賞受賞者が著名であるが、名古屋大学博物館では、これら4名の博士の経歴や活動に触れることができるコーナーがある。もちろん、公開施設であり、内外を問わず利用可能であるが、特に名古屋大学で学ぶ学生達にとって、在学中に偉大な先人たちの足跡を身近なところで感じることができるのはとても価値あることであろう。

(土崎哉)